

コロナ禍におけるせたがやこどもフードパントリー実行委員会 活動からみえた地域子育て支援ネットワークの意味

松田 妙子

(NPO法人せたがや子育てネット 代表理事)

2020 年の新型コロナウイルスの感染拡大防止に伴い、学校や保育園が休みになり、様々な困難を抱えながら子育てしている家庭に打撃を与えた。「せたがやこどもフードパントリー」はその中で生まれた活動だが、その動きの背景には、長年作り続けていた地域の子育て支援ネットワークがある。急ごしらえで立ち上げた食材配布の活動がスタートして 8 か月経過したところで、これまでの動きと、その土台となる背景について振り返ってみる。

せたがや子育てネットの概要

せたがや子育てネットは、広く子育てに関わる一般市民に対して、子育て支援に関する事業や、子育ておよび子どもの育ちを地域全体で支えあうネットワークづくりに関する事業を行い、子どもと大人、個と社会それぞれが多様性を認め合い、すべての子どもと親が生き生きと心豊かに暮らせるコミュニティの形成に寄与することを目的とし、2004 年法人化した団体である。子育てネットワークの形成を促進することを目的に、ママパパぶりっじ・ママチャリねっとを母体として、インターネットの活用やミニメッセの開催、情報紙の発行などの活動を行ってきた。区内の様々な子育て情報を集約し提供することを通じて区内の子育て支援の一端を担ってきた。また、モデルとなる活動を地域に具体的に生み出す試みとして、下北沢でコミュニティカフェ（2008～2010）や、UR 都市機構と協定を結びキッズスペースを運営（2010～現在）してきた。同時に区内の子ども子育て支援に関わる多様な人たちとのネットワークを形成し、地域に「あったらいいな」の資源を生み出してきた。

現在の主な事業は以下の通りである。

1. おでかけひろば（世田谷区地域子育て支援拠点）の運営
おでかけひろばぶりっじ@roka（南烏山 2 丁目）
おでかけひろばまーぶる（瀬田 2 丁目）
おでかけひろばすぷーん（深沢 2 丁目）
おでかけひろばおりーぶ（奥沢 2 丁目）
2. 世田谷区地域子育て支援コーディネーター（利用者支援基本型・子育て世代包括支援センター）の運営
中間支援センター（宮坂 2 丁目）
烏山地域子育て支援コーディネーター（ぶりっじに併設）

玉川地域子育て支援コーディネーター（まーぶるに併設）

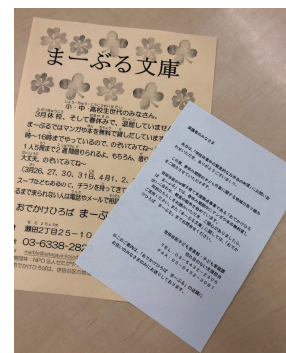
3. 産前産後セルフケア講座の運営（区内児童館に年2回巡回して実施）
4. 千歳温水プール・大蔵運動場の各種プログラムに託児を提供
5. 赤ちゃんをつれて学校へ（赤ちゃんふれあい体験授業）の運営及びファシリテーター養成・各エリアの立ち上げサポート
6. 区民版子ども子育て会議の企画運営（世田谷区と共催）
7. 世田谷区はっとステイ従事者研修（保育サポーター養成）
8. 関係機関運営サポート（ファミリーサポートセンターアドバイザー研修、フォスターホームサポートセンター各種里親研修）
9. その他

新型コロナウイルスの感染拡大防止のために大いに悩む

せたがや子育てネットは3月3日に運営している4つのおでかけひろばを閉室とした。（一時預かりと利用者支援の相談事業は継続）他のひろばが運営を続けている中、閉室するのは悩ましい判断だった。瀬田2丁目のおでかけひろばまーぶるは、蔵書を開放し、漫画文庫を始め、地域の小中高校生に貸し出しを始めた。

休校が続く給食が無い時期の子どもの食を応援するため、軽食を配布することを決めた。ひろばのスタッフが細やかな配慮でパン屋に交渉したり、持ち帰りのセットの準備をしたり、赤い羽根共同募金の助成金を獲得したりしてくれた。みな、地域の子育て中の親たちだ。社会福祉協議会を通じて東京都の補助金がいただけることになり、活動が本格化していく。3月25日からの文庫には、区で実施していた弁当配布の申し込み家庭の中から、まーぶるに近いエリアの方々にチラシを配布してもらったところ、毎日取りにくる子どもたちがいることに軽い衝撃を受けていた。

3月27日・28日には、きたざわおせっかいクラブが下北沢の駅前でお弁当を配布、同様に感じるものがあったという話になり、斎藤代表とこれは本格的に食の支援を始めてはどうかという話になった。「なくそう！子どもの貧困全国ネットワーク」の世話人でもあるTさんに相談し、「せたがやこどもフードパントリー実行委員会」の構想をまとめた。4月14日には区内5カ所で第1回の弁当配布がスタートし、その後8か月間、休校が終わってからは弁当配布から食材配布に切り替えたが、休みなく活動は続き、2020年12月29日までに120回の活動を通じ、約250家庭500人以上の子どもたちに約8500食を提供してきた。せたがや子育てネットは経堂の事務所、瀬田のおでかけひろばまーぶる、南烏山のおでかけひろばぶりっじ@rokaにて配布、現在一回の担当分はトータル300食を超



えることもある。

せたがやこどもフードパントリーのひとつの特徴は、活動の初期に Amazon の「欲しいもののリスト」を作成して、そのリストから食料品を選んで個人から寄付いただいたこと。東日本大震災でも活用された仕組みだ。4 月 10 日に Facebook でお願いを拡散したところ瞬く間に 26 件シェアされ、18 日に朝日新聞に掲載されると、どんどん拡散され、支援の輪が個人にひろがって続々と物が集まり始めた。



あらゆる人たちがテレワークをしていて、自宅で PC の前に座っていたことも大きな要因だったのだろう。何かできないことはないか？と心を寄せてくださる方々により、6 月までだけでも届いた荷物は 400 件を超えていた。その後、大型の助成金を獲得し、購入型に切り替えているものの、未だに支援は続き、定期的に送ってくださる支援者も現れた。6 月からは、せたがや子育てネットの事務所の地下に部屋を追加で借り、本格的に倉庫が稼働しはじめる。

もう一つの特徴として、様々な「つなぎ」により企業や店舗からの食品をいただいたり、すでに他地域で活動していた団体からの支援を受けることができている点である。お米 300 キロを 2 キロずつに分けて配送して下さった方。お弁当とデザートが無償提供して下さったパティシエチーム。日本 NPO センターの仲介で企業からのお菓子の提供も受けることができた。もともとシングルマザーの支援をしている NPO からは活動の情報をいただき、お米、お肉、子ども靴などのプレゼント企画を案内することができた。ここには記載しきれないほどの支援をうけながら活動している。



また、区役所の方からは商店街や JA につないでいただいたり、休校のため使われなくなった体験教室用の畑のじゃがいもの提供もいただくことができた。



本多劇場グループは荷物の搬送やお弁当配布の協力、応援ライブからの寄付など長きにわたりバックアップして下さった。三軒茶屋エリアではライブハウスが配布するお弁当を作ってくれ、パントリーの紹介動画ができあがった。区内のアーティストがポストカードのデザインを提供して下さり、ポストカードドネーションを展開し、活動を広報、寄付集めに寄与して下さった。年末には地域グループ「まち道楽」が世田谷パブリックシアターや大学等に声をかけあってサンタプロジェクトを展開、個人の寄付により 370 人の子どもたちにクリスマスプレゼントとし

て図書券が提供された。Facebook で手拭いを募って日本風エコバッグ“あずま袋”を縫ってもらい、ひろばの利用者や支援者が購入してくれ、小さな寄付を生み出したこともあった。世田谷コミュニティ財団は「かけはし基金」を創設し、クラウドファンディングに挑戦する私たちをサポートしてくださった。（100 人を超える寄付者により、10 キロのお米を利用家庭に提供することができた）衣替えの時期にはおでかけひろばや PTA つながりで声をかけサイズアウトした子ども服を募って、食材配布の横に「ご自由にどうぞ」コーナーをつくることもできた。地域の人たちの豊富なアイディアと惜しみない協力が、「食」だけでなく、地域で見守り支える雰囲気を醸し出してくれた。

また、食料支援の活動の中には宅配や郵送によって家庭に届ける仕組みをとっているところもあるが、あえて取りに来てもらう形をとっている点が特徴だ。各地域の配布時には主任児童委員や施設職員、地域の活動団体メンバーなどが関わり、子どもや保護者と顔がつながる工夫をしている。食の提供だけでなく、その後の地域での日常の関わりが生まれるよう配慮し、ひとりひとりの背景にある困りごとなど、相談したいことが出てきた時には速やかに応答できるよう心掛けている。

せたがやこどもフードパントリー実行委員会が立ち上がった背景

せたがや子育てネットは NPO 法人格を有しているが、そもそも、「団体」ではなく、子ども・子育てに特化した中間支援活動を志向した、ネットワーク体だ。1990 年代から開始していた子育て当事者たちのメーリングリストと情報チラシを児童館に配布する「ママちゃりネット」という活動のメンバーと、総務省の情報データベース作成を目的とした「ままばぶりっじ」、子育てメッセを区に提案し、協働で開催がスタートした際のネットワークが母体となって、2004 年 NPO 法人化した活動だ。次世代育成支援行動計画作成時（第 1 期子ども計画）には前期後期と「地域別懇談会」を開催し、多様な団体が集まって、区内の子ども子育ての状況について語り合い、その内容が計画策定の参考にされた。当時隣接する杉並区では子育て応援券というバウチャー制度がスタートしていたが、世田谷はセーフティネットや現物支給に力をいれていて、区内の子ども子育て支援の活動は創設されたこども基金などに応募し、活動を広げていった。

2014 年には、2015 年からスタートする子ども子育て支援新制度スタートにむけ、区の計画づくりに平行して「区民版子ども子育て会議」をはじめ、1 年間かけて多様な主体に声をかけつつ様々なテーマで地域の中の課題について語り合う場を持った。

子ども分野は 0 歳から 18 歳まで幅広く、（さらに言えば妊娠期からの切れ目のない支援として）オール世田谷で俯瞰して考えていく区民版子ども子育て会議であったが、ネットワーク構築にはかなりのエネルギーを要した。1 年間で 11 回、参加者数は回ごとに差があったが、地域の活動団体のみならず、区の職員や社協、医師、社福の施設長、保育士、若者当事者、乳幼児の保護者など多様で、参加者の所属は 100 を超えていた。

「子どもの生きる力をはぐくむ」というキャッチフレーズは、区民版のワークショップを経て、「こどもがいきいきわくわくそだつまち」と変更された。これはメンバーの成功体験となる。地域側の提案は届く、という実感を得ることができたのは大きかった。若者支援担当課ができ、新しい居場所のあり方について若者たちの意見をたくさん聞いた回もあった。その後、希望丘青少年交流センターの立ち上げにつながっていった。新潟県上越市からゲストを招き、利用者支援事業基本型の先進事例を官民ともに学んだことは、地域子育て支援コーディネーターの誕生につながった。赤ちゃんをつれて学校へいく取り組みも、0 か 100 ではない働き方としてのワークスペース付きおでかけひろばも、区民版子ども子育て会議で生み出された発想だ。

2015 年 1 月には子ども・子育て応援都市宣言の宣言文のためのワークショップも行われた。子どもは失敗してもいい、子どもは地域の宝である、といったキーワードが生み出され、最終的な宣言文を作成する際の参考とされた。

2015 年いよいよ子ども子育て支援新制度がスタートし、せたがや子育てネットは、地域の身近な場所場所として、間口を広くするための地域子育て支援拠点（おでかけひろば）を身近なエリアごとにつくるため、空白地に毎年のように開設していた。一方で利用者支援事業基本型（世田谷区地域子育て支援コーディネーター）受託もスタートし、奥行きの深い支援のため、関係機関との連携も模索していた。また、せたがや版ネウボラがスタートし、区と連携して産前産後の身近な相談体制を構築していった。2018 年には、世田谷区の第二期子ども計画策定のための「生活実態調査」が実施された。（結果は 2019 年 11 月発表）このころ「区民版子ども子育て会議」で貧困をテーマにしてはどうかと話をだしていたが、調査の結果などを踏まえてからでもいいのでは、と先送りになるようなトーンだったことを覚えている。正直、誰もが気が重く、手を付けていくには覚悟がいるテーマであったことは否めない。しかし 10 人に 1 人は生活困難層であるという結果は、フードパントリー活動を続けていく原動力にもなっていた。始めた活動から見えない貧困が確実にあるという実感と共に、調査から見てきた事実・エビデンスは、まだ出会えていない家庭を想像してどう動くかを考えることにもつながった。行政の明確なスタンスは、私たちの行動を後押しした。

「官民連携」「協働のまちづくり」は言葉だけが上滑りしやすいと感じるが、今の手つなぎの仕方は「いい感じ」なのではないか。地域側は力をつけ信頼に応え、行政側と一緒にたまたま担当者が熱心だったから、とならないよう左右されない仕組みをつくりつづける必要がある。

世田谷区の計画に地域子育て支援拠点（おでかけひろば）の数値目標が明記され、乳幼児期に関わる地域の活動は、おでかけひろばの立ち上げと共に活発化した。地域の人たちが組織化して、自分の地域子どもたちとその親に対して居場所を提供し、伴走する。団体はおでかけひろばを運営することで、持続可能な事業体として変化していった。しかし、逆に地

地域の団体が学童期に関わる活動は少なかった。児童館が25館、学童も小学校ごとの「新BOP」として直営であり、地域に根差した居場所として定着していることも大きな理由のひとつだろう。世田谷では全国ワースト1位の待機児童数を抱えながらも、単なるその解消でなく、同時に「保育の質のガイドライン」を作成し、質の高い保育を目指してきた。単純に考えてもそれだけの保育需要に応えたら、数年後に学童需要が爆発することは自明のことだ。今後、子どもの放課後に、地域の団体がどう関与していくのか。児童相談所や一時保護所を直営で抱えた世田谷区にとって、地域の団体と連携した予防的な子どもたちのケアのあり方については更に検討が必要になってくるだろう。乳幼児家庭支援のNPOが事業を通じて育ったことは一つの練習問題だったのかもしれない。行政が地域の人たちが組織化して活動から事業を起こしていくことに対して信頼してくれたこと。根気強く待ち、アドバイスしてくれることで、各地にまさに「地域の子育てを支援する拠点」が生まれていった。コロナ禍でのおでかけひろば同士の連携や、子育て世代包括支援センターとしてのコーディネーターの動きはまさにそれまでのネットワークが見えない「筋肉」となって働き、細やかな支援を地域で展開することができた。

コロナ禍での地域子育て支援の状況

コロナ禍において様々な相談事業やプログラムが休止した中、地域子育て支援コーディネーターは稼働していた。前年度から子育て世代包括支援センターとして、健康づくり課や子ども家庭支援センターとの連携を進めていたことが有効だった。フードパントリーで繋がってきた家庭で必要があれば、各地域のコーディネーターを紹介し、子ども家庭支援センターに同行や、インフォーマルな資源につなげる等の支援をしてもらった。逆に、コーディネーターに繋がってきた家庭をフードパントリーに紹介してもらい、食のサポートが始まったケースや、保健師さんや子家センのワーカーさんがフードパントリーを紹介してくれ、配布場所であるひろばで顔をつなぎ、日常のひろばの活動や一時預かりなどの利用を促すなど、連携して地域に繋げるサポートできたケースもあった。

また、区内おでかけひろばの有志でオンラインミーティングなどを重ねて開催し、閉室中の家庭支援の方法や工夫について情報交換が行われた。コロナ禍での家庭の状況について、ひろばとコーディネーターが把握したケースをWEBアンケートを実施、とりまとめ、子ども子育て会議にも資料として提出することができた。

せたがやこどもフードパントリー実行委員会は、コロナ禍で急速に立ち上がり、力技で実現させていくエネルギーに満ちていたように見える。しかし、早期からの行政の協力体制も、つながった家庭への支援を様々な地域の支援者が連携して展開していけるのも、こうした長年積み重ねてきた信頼関係を土台としたものだったと言えるだろう。加えてイレギュラーな緊急事態に地域側が柔軟に活動していくことに「受けて立って」くれた、子ども家庭課

の懐の広さ深さに助けられて活動が展開していった。

のりしろ型、予防型の子ども子育て支援

せたがやこどもフードパントリーは、まだまだほんの小さな、地域での試みだ。区内のすべての生活困難層にアプローチできるはずもないが、強みは、日常の地域子育て支援の活動があることだ。その地域の人たちが場をひらき（おでかけひろば）、ベビーカーを押して歩いていける距離にたくさんつくられていること。食の支援は緊急的な、対処療法として最初はとらえていたが、これもまた、地域の日常的なつながりと予防であると気づかされた。誰もが困っていることを発信していいのだという空気と、必ず応答してくれる人がいること。限りはあるが、接面が広いこと（現在区内4カ所で定期的に行っている）カナダでは地域の居場所に食料品のかごがあり、必要な時に必要なだけ持って帰れる仕組みがあるとのこと。今回のせたがやこどもフードパントリーの取り組みがうまく日常の活動に着地して、利用者と関係をつくりつつ必要に応じて重層的な支援につなげていく仕組みができるといいのではないか。

私たちは利用者を守ることを大事にしているため、取材なども慎重に、露出を避けてきたところもある。同様の主旨から利用家庭に関する具体的な状況などは紹介を差し控えるが、利用者からの感謝の声や活動していく中で生まれたささやかな交流、様々なエピソードはつきない。活動の様子は Facebook ページで折々に紹介しているので、ぜひウォッチしていただけたらと思う。

支援の受け手が支え手にもなる循環型の社会を目指し、今後も「おたがいさま」の気持ちで活動を継続していきたい。

[参考文献]

- 平成 30 年度子どもの生活実態調査（2019 世田谷区）
- 子ども子育てコミュニティワーク（2014 セタがや子育てネット）
- 発達 146 号 地方発！保育・子育て支援の新たな取り組み（2016 ミネルヴァ書房）
- 地域から生まれる支えあいの子育て（1999 小出真美 ひとなる書房）